



- 体育会名: 関西学院大学体育会洋弓部
- 創部年: 1959年(昭和34年)
- 2025年度部員数: 98人(4年26人、3年19人、2年33人、1年20人)

- 同窓倶楽部名: 関西学院大学体育会洋弓部OB会
- 設立年: 1962年(昭和37年)
- 会員数: 784人(男性532人、女性252人)

* 物故者含む

1959(昭和34)年、日岡邦夫、那谷吉彦、秦井登、東山禎仍により洋弓(アーチェリー)同好会が設立された。当時学生課長だった柄欽一郎氏(のちの総務部長)から小嶋吉雄教授(理学部)へ、「洋弓同好会の面倒を見てやってほしい」という依頼があり、2日のちに日岡ら初代メンバーがあいさつに行った。

当時の練習は竹の弓に麦藁帽子、関学裏グランドキャニオン(現在の第3フィールド)、砦に四方を囲まれ西部劇を思わせるような格好で行われていた。関東ではすでに洋弓部を設立している大学が4校あったが、関西ではそのころ関学だけ。その後1、2年で部員も急増し、他大学にも部ができるようになり、関西学生アーチェリー連盟が設立(61年4月21日)された。

関学は当初同好会で、部に昇格するためたいへんな努力が必要であった。64年に体育会洋弓クラブとして入会。68年12月8日、結成10周年で体育会洋弓部へ昇格したときには、小嶋部長は「本当にうれしい思いをした」と書き記されている。



設立当初は満足なレンジ(洋弓場)もなく対戦相手もない状態で、上ヶ原の裏山で、ただ標的に向かって練習を重ねる毎日だった。そんな創部時の精神力・成績を称賛し、後輩たちに伝統として引き継いで欲しいとの思いで、小嶋部長は『Scratch the Ground』の言葉を洋弓部に残された。「ひとのまねをせず、個性あふれる、歴史に耐える痕跡を自分自身に、また後輩

たちに残しなさい」と言うメッセージだった。



新グラウンドの東端に新レンジができたのは、62年3月6日のことだった。終日太陽を正面から受けるという欠陥レンジではあったが、当時30万円の工費をかけた立派なものであった。

関西学生連盟の初代委員長は伊藤隆之で、根本彬を主将として活躍した。次の年は田宮正弘を主将、前原哲雄を主務に全日本王座に輝いた。破竹の進撃を続ける関学洋弓部は、61年、63年、64年の王座決定戦(学生日本一決定戦)で学生全日本王座を勝ち取った。このときの対戦校である学習院大とは、現在も年に1度定期戦を行っている。インカレでも、62年の第1回に岡橋元明が、68年には福嶋路子が学生日本チャンピオンになった。

しかしながら、年と共に他大学の実力が向上し、関学の戦績は浮き沈みしながら次第に下降した。これは、体育会全般の流れでもあった。

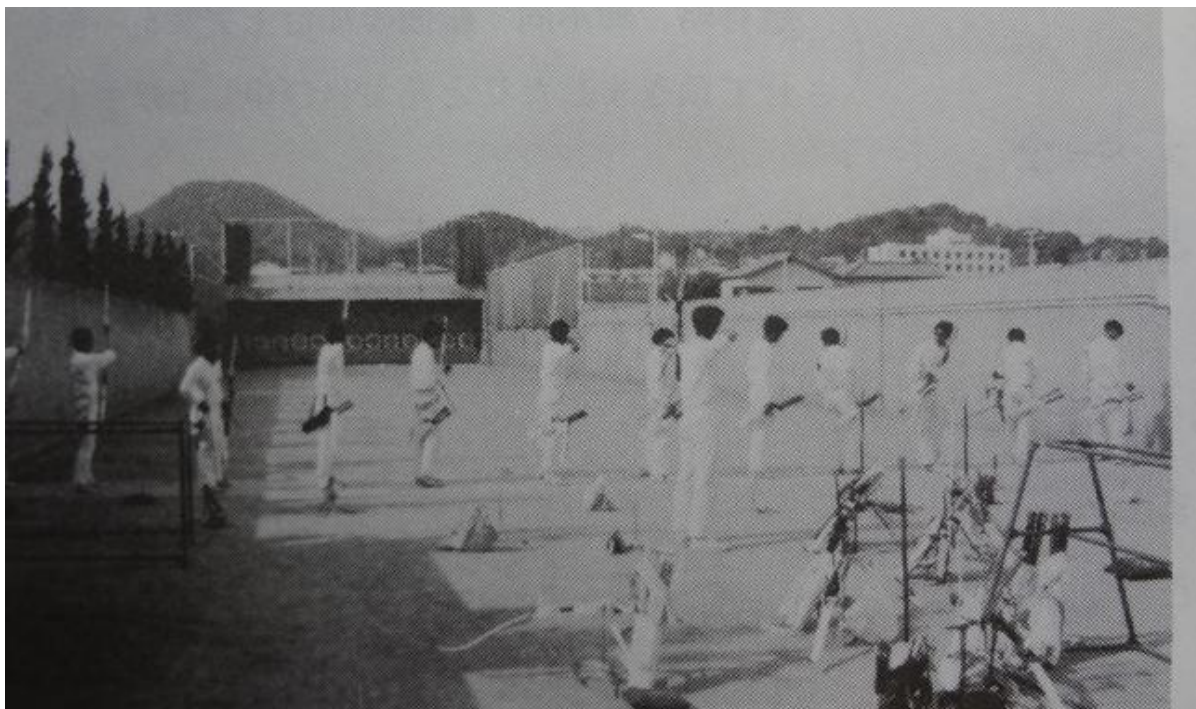
そんななかでも、女子は、峯登志子が74年インカレ2位、75年にはチームを関西制覇に、同6月には女子部初の全国制覇に導き、世界選手権にも出場した。辻紀子は同じ年の10月のインカレで学生チャンピオンになった。81年にも女子は関西制覇を遂げた。

進藤紀代子は83年から関西学生個人選手権3連覇、84年から全日本学生個人選手権2連覇を成し遂げた。さらに85年には全米選手権、世界選手権に出場し優秀な成績をおさめた。



一方、低迷していた男子は79年から団良忠監督のもと、新体制を敷き86年に関西学生リーグ1部復帰を果たした。

80年12月7日、現在の場所(西宮上ヶ原キャンパス第2フィールド)に立派なレンジが完成した。高校からの優秀選手を獲得することが困難な当時の体育会に対して、少しでもよい環境で成績の向上を目指すという学院理事会の配慮があったからである。このときは、当時学生課課長だった中西格郎副部長(のち常務理事)にご尽力を頂いた。



28年間洋弓部を見守っていただいた小嶋部長(2005年ご逝去)が88年に退職された後、同じ理学部教授の渡辺泰堂部長(08年ご逝去)に退職されるまでお世話になった。

95年には、神戸三田キャンパス開設に合わせ三田レンジが設置された。現在の国際大会で主流の、70mが行射できるレンジである。

2005年から13年の定年まで文学部教授の中谷拓士部長にお世話になり、09年1月に創部50周年記念レセプションを開催した。中谷部長が退職された後の13年4月には商学部教授渡辺敏雄部長を迎え、11年間お力添えいただいた。その後、24年4月に生命環境学部教授橋本秀樹部長が就任された。副部長には、中西氏の後、梶田行雄氏(常務理事)、清水勝氏(常務理事)に続き、現在は寺脇誉裕氏(経理部長)にお世話になっている。

関西学生リーグの成績は、男子が1部復帰した86年以降、ずっと1部を維持したのち99年に2部降格。04年に1部復帰したものの、09年2部降格、13年に1部復帰、16年に2部に降格した。女子は86年より部員不足で2部に低迷していたが、99年に1部復帰し、以降1部を維持している。

近年は新入部員勧誘と育成に注力することで徐々にチーム力が向上、男子は19年に2部の他校を圧倒して1部リーグに復帰した。この勢いで翌20年春のリーグ戦に臨もうとした矢先、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言のため全試合中止。その後コロナ禍で充分活動できない時期が続いたが、その間も勧誘活動を継続し部員数を維持。21年に就任した進藤紀代子監督のもと、23年に男子が関西リーグ戦でAブロック優勝、実に59年ぶりに王座決定戦に出場し、全国6位の成績をおさめた。女子は1部を堅持しながら11年、17年、23年に王座進出。23年の男女同時王座出場は、創部以来初であった。その後も24年、25年と3年連続で男子部・女子部そろって王座に出場した。

アーチェリーは、経験者はもちろん大学から始めた者も活躍できるスポーツで、関学は現在、大学洋弓部としては全国屈指の部員数を誇り、チーム内の競争を醸成することで全体のレベルアップをめざしている。



上ヶ原レンジ



三田レンジ



王座決定戦にて

洋弓部 部史 編集担当者

伊藤隆之(S37 商(故人))、多田碩孝(S45 社)、水谷謙二(S57 経)、飛垣一郎(H5 経)